

茶道部の活動報告

私たちの活動の中で、主なものといえば、やはり茶会、合宿といえるでしょう。合宿は次の面の特集が組まれているので、ここでは添釜茶会と、雪待茶会をとり上げてみました。

添釜茶会

添釜茶会とは、学園祭のときに他大学の方をはじめ先生方、OGの先輩方、学園祭にいらして下さった方々をお招きして催す茶会です。

本年度は、十月二十二日、二十三日の二日間、二百人余りの方々に茶会にご出席頂き、無事終了することができました。

本学学生会関係室内にある大妻庵にて二年生の席を、広間にて、三年生の席の二席を設け茶会を催しました。大妻庵は、我茶道部が誇る立派な茶室です。昭和四十一年に設けられた襖、欄などをそっくりそのまま新しい茶室に再現された伝統あるものなのです。

今回の茶会で使用した道具は、我部創立四十五年以來少くもつ集められ大切にしてきたものはかりです。また、大妻庵の席で用いた菓子も例年通り「校章紋」。その名のとおり、本学の校章を型どりしました練切を古くからお世話になっている菓子屋である「ささま」にて注文しつくって頂きました。

した。茶会を催すとき、この道具と菓子を先生に相談して決めることは楽しみのも一つです。

一、三年生にとつて、人前で点前をする初めての機会となり、大変緊張した茶会となりました。しかし、プレッシャーに負けず、堂々とかつ丁寧

に点前や半束を遣り遂げたように思います。二年生にとつては昨年を引き継いで二回目の添釜茶会となりますが、着物を着て点前をするということ

は初めての経験のため、練習のときと勝手が全く異なるので、戸惑うことが多く、また自分で茶会を催すための準備をすべて進めなければなりません。先輩方の御苦労や茶会を催す大変さ、厳しさを改めて実感させられました。そしてこの茶会の反省点を活かし、「雪待茶会」を成功させたいと思いをしました。

雪待茶会

木枯らしの吹く季節となり、今年もまた恒例の雪待茶会まで残すところあと一ヶ月程となりまし



「雪待茶会」という名前を初めて耳にした時、なんて風情のある名前なのだろう、おそらく昔から言い伝えられているのだらうなと思っていました。ですから、この名前が昭和五十一年度に名付けられ、今までもずっと使われてきているということを知った時は、驚くとともに、大切な名前なのだと強く感じました。

昨年、雪こそは降りませんでした。非常に寒い中での茶会となりました。しかし、大勢の方々にお越しただいて、盛況の中を終えることができました。

本年度は、創部四十五周年ということで、靖国神社から、二間をお借りすることになりました。そのうちの二つ、靖泉亭では現在御指導をいただいている齊藤宗雅先生に点でていただくこととな

り、四十五周年記念にふさわしい、立派でにぎやかな茶会にしたいと思っています。先生方をはじめ、部員全員で今から色々とお案を出しあい、茶会当日を皆心待ちにしています。

今年の席は、二年生は昨年と同様に広間で行いますが、一年生は立礼で行うこととなります。この雪待茶会は、二年生にとつて最後の茶会です。スポーツでいえば引退試合のようなものですが、今までお稽古してきたもの集大成を披露するものと思つて、ベストを尽くそうと思つています。一年生にとつては、二度目の正式な形での茶会で、緊張はしているものの、前回の添釜茶会での経験を生かしより素晴らしい茶会にしよう、と張りきっています。

この茶会を行うにあたり、靖国神社の方々に始め、OGの先輩方、その他大勢の方々の協力を得ることができ、この場をかりて改めてお礼を申し上げます。

◆ ◆

ここで、私達の普段の活動状況について書いてみたいと思います。活動日は基本的に毎週火曜日は基本練習、水曜日は雪待茶会が最後となります。簡単にのべてきました。が、だいたいこのような内容で活動を行っています。そして、次は足の運び方

の練習、割稽古という具合に進めていきます。そして夏合宿の朝茶会までには、点前がきちんとできるように練習します。その間二年生は、欄点前を中心に練習します。

後期に入ると十月にある文化祭の添釜茶会に向けての準備と稽古が始まります。前期の間は稽古のみの活動でしたが、後期はとも忙しくなります。今年は一・三年生、二年生ともに半年前でしたので、今までの練習を引き継ぎ行いました。また準備の方も文化祭係を中心に着々と進められていきます。そして添釜茶会が終わると、すぐに十二月の雪待茶会の稽古に入り、ここで年の点前変わります。今年は一・三年生が雪待茶会で立礼席を持つため立礼の稽古、二年生がの欄点前の稽古をしてまいりました。

また添釜茶会の時と同様に、雪待茶会の準備を始めます。添釜茶会に続いて二度目の茶会ということ、一・三年生も大抵の様子が変わり、準備も比較的スムーズに行うことができます。そして雪待茶会をもつて、二年生は引退です。その後、クリスマス会、初釜、送別会等には出席しますが、茶会を自分たちでもつのは雪待茶会が最後となります。

年間行事

- 一月 初釜茶会
 - 一、三年生が引きついで初めて行う茶会です。ここからまた新しい茶道部がスタートします。
- 二月 送別会
 - この会で一年生は齊藤先生より、おゆるしと終了証書を頂きます。これは茶道部の卒業式のようなものです。
- 四月 新入生勧誘茶会
 - 新入生に茶道を少しも知り、興味を持ってもらえるよう茶会を催します。毎年たくさんの方々が新入生が見学に来ます。
- 九月 夏合宿
 - 五泊六日の鎌倉円覚寺での合宿は、朝茶会へ向けてお稽古、準備をし、またお寺で精神鍛錬するというとてもハードなものです。残念ながら、今回をもって円覚寺での合宿は終了となりました。
- 十月 添釜茶会
 - 学園祭の行事の一つとして行われるこの茶会は二日間にわたり、他大学の方や一般の方など、大勢のお客様で賑います。
- 十二月 雪待茶会
 - 靖国神社で行われる校外茶会で、部員も引き締まった気持ちで、この日を迎えます。二年生にとつては部活動のしめくくりとなる茶会です。
- クリスマス会
 - 一年生が企画して行うもので、この日は部員のいつもとは違った面が見られ、学年を問わず、楽しめる会となります。

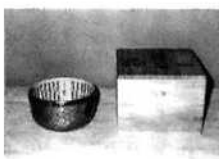
お道具の紹介

我が大妻女子大学茶道部の道具といえ、誰でも一つ、二つ思い出すものがあることでしょう。ここでは、そんな道具の中からいくつか紹介してみたいと思います。



錦手校章紋

大妻女子大学の校章紋が描かれており、私たちに馴染み深い茶碗です。これは主に学園祭の添釜茶会に主茶碗として使用しています。



赤地金欄手

内側に三十六歌仙の歌が書かれていて、初めて見た時、とても珍しい茶碗だと思った記憶があります。これも添釜茶会、雪待茶会ともに活躍している茶碗の一つです。



絵唐津白玉釉

部員にとつて数茶碗といえ、まず浮かんでくるのがこれではないかと思ひます。なかなか淡い色合いですが、趣があり、どの茶会でも使われ、部員の間でも愛着があり、とても人気のある茶碗です。



日々是好日

よく使われており、宗測書のもの、明道書のものがあります。

このように普段の生活では接することの少ない掛物や茶碗とかかわることができるよう茶道部の良い点ではないでしょうか。また、掛物の意味、茶碗の種類などを覚えることも茶道の勉強になると同時に、自分の教養の一つとなるでしょう。これからも道具を大切に使い受け継いでいきたいと思ひます。

夏合宿を終えて

—今思う事—

茶道部恒例の夏合宿が今年も行われました。この合宿は四十数年の長きに渡り、北鎌倉にある円覚寺の雲頂禅庵にて、茶道の上達、精神鍛練、更には、部員相互の協調性を高めることなどを

主な目的として行っています。今年も九月七日から十二日までの六日間の日程でした。通年よりも少し遅い時期ではありましたが、夏の記録的猛暑のため厳しい残暑の中での合宿となりました。



夏合宿、円覚寺にて和尚様と。

四十数年続いた雲頂禅庵での夏合宿も、お寺のご都合により今年で最後となりました。茶道部の歴史と共に歩いて来た合宿であり、とても残念でなりません。和尚様のお話の中に、時代の流れに逆らつてばかりではない。

新しいものを取り入れていくことが必要である。更に、伝統は捨て去り、忘れて去るのではなく、頭の中に残しておくことが大切だ。とおっしゃられていました。私達はしばしば、今までの先輩方が

築きあげてきた伝統に依存し、守つてゆくばかりで受身になつてしまふところが少なからずあります。新しいことを積極的に受け入れ、守つてゆくべきところ、守つてゆかなければならぬところを改めて再確認しなければなりません。新しいことを積極的に受け入れ、守つてゆくべきところ、守つてゆかなければならぬところを改めて再確認しなければなりません。

これからの茶道部

部される方々は「茶道を学びたい」という初心を忘れず、また新たな夏合宿を企画し、成功させて下さい。



1列目左から雨宮香織 志村麻里
2列目左から今村恭子 宇田川博子



1列目左から松野文子 山下桃子 飯島久美子
2列目左から伊藤真理 岩田美恵子 斎藤英子

〈一班〉

合宿のつらい六日間を乗り越えられたのは、班の学年の、そして部員全員の協力があつたからだと思います。私達一班は、二年生が一人という頼りない状況のなかで、一年生が互いに教え合い励まし合ひながら一生懸命に稽古に励んでくれた事が、本来一年生を精神的に支えてあげるべき一年生にとつて逆に一番の支えとなりました。

お稽古ではなく、日々の積み重ねを大切にして頑張つていきたいと思つています。

〈二班〉

去年の厳しい夏合宿から一年経ち、例年になく少ない部員になつてしまいましたが、二班の二年生は一人もかけることなく稽古に参加しました。と言うのも、なぜか二班はしっかりした人が多いのか、ここ二、三年で部長、あるいは副部長が選出されていきます。今年もうれいことに副部長が選ばれました。さて、今回の班員は、一年生二名、一年生(学部)二年生も含め二名と、他の班から比べれば思われた人数ではありません。一年生が受身ではなく、お稽古も意欲的に

覚え、食事当番も二年生からの指示を待つのではなく自分達で考えてくれたことには大変助けられました。一年生から学ぶことの多い今年の夏合宿でした。

〈三班〉

この夏合宿というものは、部員同士の絆を深めるためにとても大切な二回の合宿を経験してみても強く感じます。私達三班は五人と少人数ではありましたが、一年から二年まで、先輩、後輩という区別がありながらも皆で協力し六日間を過ごせたと思えます。これは二班に限らず、一班から四班まですべての班が、班にこだわらずに協力しあひながら稽古してきました。人数が少ないことも理由にあげられますが、班の中の協力、そして部員全員が助け合つて行うことのできた合宿だつたと思います。円覚寺で行うのは今年が最後となつてしまいましたが、他の場所になつても是非、合宿を続けてほしいと思います。

〈四班〉

私達四班は、二年生三名、一年生三名計五名で成り立っており、例年と比較するとかなり少人数ですが、その分合宿中は、かなり密度の濃い練習が出来たと思えます。

今年も、個性的な人が集まり、食事当番などを協力して楽しんで手際よく行うことができた仲間です。他の班に比べるとサバサバした人が多いように思いますが、練習場所も他の班から見えにくい奥の方で美しい中庭を見ながら、マイペースで練習に取り組みました。例年通り今年もまた茶料の命名に力を入れた「鈴虫」と名付けました。円覚寺での合宿は今年限りとなつてしまいましたが、他の場所でも合宿をやることになつても四班ならではの稽古を続けていきたいと思えます。

〈編集後記〉

茶道部の四十五周年を迎え、その記念と自分達の活動の再確認という意味で新聞作りを始めました。作るにあたっては、わからない事が多々ありましたが、部員全員の協力で完成することができました。

四十五年間のすべてを紙面に表すことは出来ませんが、私達の活動する二年間が、大妻茶道部四十五年間の積み重ねの上にあるということを認識いたしました。

最後になりましたが、諸先生方にはお忙しい中ご協力いただき厚く御礼申し上げます。



左手前から内堀やよい 小森志津
右手前から島崎絵美 岡崎香織
佐藤加代子



1列目左から戸塚彩 神野智子
鈴木かおり
2列目左から市川真弓 金子麻理